連載 観光まちづくり最前線 No.12 地域を歩くレポート

学び舎から都市交流施設へと生まれ変わった　道の駅 保田小学校
～なつかしさと新しいスタイルの融合～

帝京大学　経済学部　観光経営学科　大下ゼミ

あけましておめでとうございます。vol.97の特集『廃校を活用したまちづくり』につづいて、廃校を利用した道の駅として、マスコミに取り上げられ話題となっている千葉県・鋸南町の保田小学校を取材してきました。

■道の駅保田小学校はこうして生まれた！！

保田小学校は、アクセスに優れていることから、地域創生の起爆剤とすべく廃校後の利活用計画が立てられました。2014年３月に百年の学び舎は幕を閉じ、2015年12月に都市交流施設・道の駅保田小学校として生まれかわりました。

廃校を道の駅としてリニューアルした類例はありますが、レストラン、宿泊、温浴、直売所など、これだけの複合施設は他にはないことから話題となり、マスコミ報道の後押しもあり、かなりの集客を実現しています。現在では、「都心から近い田舎」「海や山に囲まれた恵まれた立地」「一粒で二度美味しいロケーション」と称され、地域外からのお客様が全体の７割を占めるに至っています。指定管理を受託している民間企業の有する柔軟性のある経営ノウハウが随所に垣間見ることができる施設です。

道の駅・保田小学校の全景、１階はレストランや案内所、２階は宿泊施設に。校庭が駐車場。

■学校に泊まれる!?　複合施設で魅力いっぱい

都市間交流施設として、「地域外から訪れる人々をどうやって保田のファンになってもらうのか」～その鍵は宿泊機能を導入したことではないでしょうか。宿泊部屋は、教室を半分に区切り、そのまま利活用。客室には、黒板や子ども達がランドセルを収納していた棚等がそのまま残されています。大人の目線では懐かしさを感じる雰囲気となっている、新しいタイプの道の駅です。

鋸南百貨店というアーティストが製作した商品を販売している店があります。食堂のメニューには11月から新しく学校給食の限定メニューが提供されています。「学校なのに給食ないの？」という訪れた人の意見に応じたメニューとのことでした。訪れた人の意見を大切にしていることが、この点からも見て取れます。

平日に取材に訪れましたが、駐車場が空いている時間はありませんでした。注目すべきなのは、滞在時間の長さです。道の駅の来訪目的は、トイレと農産物の購入が主目的と言われているため、短時間滞在が多いのが特徴です。しかし保田小学校は、学校内を回遊するという、新しい体験も加わっていることから１時間以上の滞在も。滞在時間が長くなると、自然に消費額も高まっているものと想像できます。

平日10食・休日20食限定「保田小給食」。価格は、すばり、850円～!!

客室の風景～少し高い畳ベッドと、低い畳ベッドの４人室。小さなお子さんも安心!!

■道の駅保田小学校のこれから

現在は、千葉県の対岸の神奈川県からの来訪者のニーズに応じた商品メニューを揃え、開業当初の円滑な運営に心がけてきたそうですが、長期的に見ると、地域の人たちをターゲットにしたいとのことでした。持続可能な運営をつづけていくためには、地元の方々に愛される施設である必要があるとのことでした。

実際、道の駅内のテナントのほとんどが地元のお店です。どのお店の内装も小学校で使われていた部材を活用して瀟洒（しょうしゃ）に再利用されています。体育館を再利用した『きょなん楽市』では、千葉近郊の特産品だけでなく、長野や函館の商品まで売っていました。一方、保田小学校ならではのオリジナル商品も数多く販売されていました。こういった工夫には、地元の方々を呼び込み、リピーターを増やしていく狙いがあるのではないでしょうか。

小学校であったことの記憶を残しつつ、顧客層のニーズに合わせた柔軟な対応をしていることが注目される理由であり、開業から１年を迎える現在、地元の方々が訪れたいと思う道の駅保田小学校へと変わっていく取り組みに、今後とも注目していきたいと思います。

（樋口真奈美・田中岳・中村翔太）

校舎・黒板やリコーダーをモチーフにしたお菓子類はすべて、オリジナルの企画商品。

中華料理「3年B組」のテーブルは、バスケットボールのボードの利活用。
元は理科室とのこと。案内説明ただいた大塚校長（駅長）です。